

# 隨泉寺寺報

2003 年 12 月号 第 400 号 Tel 082-892-0217

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺  
報恩講法座

講師 西応寺住職 平義晃師

講題 「呼び声も返事もともにお念仏」

正月の 待ち遠しさも 昔かな 小林一茶

今年もあと一月になりました。この一年あわただしくあっという間に終わってしまう そんな気がします。昔は正月だって言ったら、何かわくわくして待ち遠しいものだったんだけどね。いつからだろうな……。お年玉をもらわなくなっただけかな。新しい年を迎える喜びよりも、無為に過ぎていってしまう時間のほうが惜しいような気がします。それだけ年を重ねたのか、欲が深くなってしまったのか、とにかく何かしら追い立てられているような、せわしなく年の瀬を迎えています。



ともかくも あなたまかせの 年の暮れ

小林一茶

## 12 月の法座予定

- 12月 2日午後6時より……………本部役員会
- 12月 14日昼席午後1時より……………報恩講法座
- 12月 14日夜席午後7時半より……出張法座 荒野 集会所
- 12月 15日朝席午前10時より……………報恩講法座 おとき
- 12月 15日昼席午後1時より……………報恩講法座
- 1月 5日午後6時より……………本部役員会

## ☆菊花展

反戦・平和は、原爆被爆をはじめとする太平洋戦争での膨大な犠牲が骨身に染みて、戦後の日本人がみずから決意して掲げた理念であっただろう。だが、戦争体験者の減少とともに平和を脅かしそうなものへのリアリティーが薄らいだのも現実だ。さらに、冷戦構造が消失するなか、(湾岸戦争における国際貢献問題は、戦後平和主義が「一国平和主義」と非難・嘲笑され、戦後平和勢力が思想的・現実的に決定的に退潮する契機となった) (小林正弥『非戦の哲学』)。大規模な運動の中核を担った旧社会党も総評も今はない。



「社会がこうした運動に過大な期待をかけることは慎まなければいけないのではないかと考えています。未熟だとしても、発信しているメッセージがあり、そこには希望を感じる。だから支えていきたい。そこで、伝えたいの

は、糾弾するだけでは平和にはつながらないということ、相手の犯している罪をあがなおうとする思いの大切さです」



## ☆焚焼会法要

いつも綺麗にお荘厳されているということなのでしょう。

《おめでとうございます》 井原の竹下トキミさんの孫 竹下正昭・育子さんが長男佳吾(平成15年6月9日生) 君とにぎやかです。

## ★隨泉寺のホームページ

隨泉寺のホームページがやっと出来ました。アドレスは次です。いちどのぞいてみてください。上平原の川野哲治さんの協力でなかなかの出来栄と思っていますが、まだもう少し改良を加えたいと思っていますところもあります。これからぼちぼちやっていこうと思っています。お寺の新聞や行事予定、坊守日記などもあり、面白いと勝手に思っています。 <http://ww41.tiki.ne.jp/~tetunari4/>



<http://ww41.tiki.ne.jp/~tetunari4/>

小津安二郎の映画『晩春』と『東京物語』を見ました。



『東京物語』は尾道の風景から始まります。尾道に住む平山周吉70歳(笠 智衆)と、とみ67歳(東山千栄子)が、東京で暮らす子供たちの所へ旅をする話です。東京で病院を営んでいる長男幸一夫婦(山村聡、三宅邦子)や美容院をやっている長女志げ(杉村春子)、戦死した次男昌二の未亡人で28才の紀子(原節子)の所に遊びに行きます。しかし子供たちはそれぞれの生活、仕事を持っており、なかなか老夫婦の面倒を見ることができません。唯一東京見物につきあってくれたのは血のつながりのない戦死した次男昌二の未亡人紀子(原節子)でした。それでも二人は元気で働いている子供たちを見て安心して東京を去ります。しかし とみが帰りの列車の中で体調を崩し尾道に帰ってから死去します。子供たちは“母危篤”の電報で尾道に呼び戻されます。葬式の後、子供たちはそれぞれの仕事に戻っていきます。子供が成長して行って家庭を持つとやがてその家庭のほうが大切になります。

『晩春』は北鎌倉の静かなたたずまいの中での、ひっそりとつつましい日常生活の物語です。婚期を逸しかけている娘を心配している父親 大学教授 曾宮周吉(笠 智衆)と、自分が嫁に行ったら父はやもめで暮らしていけるだろうかためらう娘紀子(原節子)との、互いに微妙な思いやりが描かれています。娘を持つ父としては、いつか来る日を思い複雑な思いがしました。不思議な因縁で親子としてであった。出来るならば何時何時までも一緒に暮らして生きたい、しかしいつまでも結婚せずに手元の置いていくわけにも行かない、父親と言うものは悲しいものですね。娘が嫁いだ夜、最後の場面で一人さびしくりんごの皮を向いているシーンは泣けてきました。出会いがあれば別れも必ずあります。一人生まれて一人死んでいきます。相手を深く愛すれば愛するほど、別れはつらいものです。どちらの映画も家族と別れがテーマです。



## 聞くということは吸収すること

まことの「いのち」に目覚める 1月号カレンダー 東井義雄

私は長い間、教員をやってきました。私たちは、授業の一環として、話し合いという時間を設けています。しかし、私は九州から北海道まで、あちらこちらの授業を拝見させていただいて、これが本当の話し合いだというのは、ほとんど会うことができません。言い合いなんです。そして言い合いだから討議になります。討議はやつつけ合いです。本当の話し合いというのは、じつは開き合いなんです。

だから今の若者たちの像を漫画で書くとすれば、文句はよく言うようになったから、口は相当に大きい。大きいだけでなく、人をやつつけるような口ですから、するどくどくがって発達している。目は、よろこびやしあわせが、いっこうに見えず、見えるのは不平、不満ばかりで、飛び出した目になる。耳はどのように書けばいいかといえば、あるかないかの点ぐらい打っておけばいいのではないのでしょうか。聞くということを粗末にして、やつつけ合いを育てることが、子どもの自主性を育てることだと考え違いをしてきたようです。

私は、これが本当の開き合いだなと思いましたが、北海道の板室のある小学校を訪れたときでした。ここは千九百人の児童数の大きな小学校ですが、一年生の教室で子どもたちが話しているのを開くと、子どもの顔ってこんなにも美しいものかなと思うほど、輝いた顔で話している、その声が、私の声のようにとがっていないのです。

それはどうしてかといいますと、本当にいい顔して相手の言葉をうなずいて吸収して開いているから、とがった声でなく、しみ込んでくるような声になっているのです。そして他の子どもがしゃべり出すと、みんなは身も心もそちらに向いて、うなずきながら開いている、これが本当の話し合い、聞き合いなんです。